

PROLOGUE

150周年を迎えた品川リフラ 創業からの100年、現代につながる50年

当社は、今から遡ること150年前の1875年(明治8年)に、西村勝三によって創業されました。江戸時代後期に生まれた西村は、青年時代に江戸で砲術や化学を学んでいた縁で、鉛精錬の反射炉の築造に挑むものの、そのときは失敗します。その後、銃砲店を開業したのをはじめ、機械で靴を製造する日本初の製靴工場(現在の株式会社リーガルコーポレーション)を創始するなど、欧米の技術を積極的に導入することで、実業家として様々な事業

を手掛けました。

そして、西村が明治期に入って着目したのが、文明開化の象徴である「ガス燈」でした。ここに事業機会を見出した西村は、ガス燈に使われるガスを発生させる装置(炉)に用いられる白れんが、つまり耐火れんがの製造を試みます。

東京芝浦で民間として初めて耐火れんがの製造を始めた西村は、官営工場の払下げを受けて、1887年(明治20年)に東京品川へ工場を移転し、商号をそれま

での伊勢勝白煉瓦製造所から品川白煉瓦製造所と改称。輸入品に負けないレベルまでその品質を高めました。そして、1894年(明治27年)にはシリカ耐火れんが(天然の珪石を原料としたれんが)の製造法で特許を取得し、これを機に製鉄向け耐火れんがの製造を始めます。1903年(明治36年)には、品川白煉瓦株式会社を設立。現在に至る企業の基盤が確立します。

その後も耐火れんがの需要は拡大し、品川と小名

浜(福島県)の工場に加え、1904年(明治37年)に大阪工場、1906年(明治39年)に湯本工場を新設。1916年(大正5年)には日本窯業(後の岡山第1工場)を合併すると共に、1928年(昭和3年)に岡山県備前市に岡山第2工場、1939年(昭和14年)に岡山第3工場が完成するなど、事業は順調に発展していきました。

ご存じの方も多いと思いますが、1914年(大正3年)

に現在の東京駅が開業した際、その外壁の優雅な印象を決定づけた90万個に及ぶ赤色タイルや、国会議事堂の壁の裏張りに使われている軽量れんがを納入したのも品川白煉瓦でした。

1927年(昭和2年)の金融恐慌で耐火れんがの需要が一時的に減退したものの、その後、金輸出の再禁止を契機として回復に転じ、満州事変以降も耐火れんがの需要は拡大し続けると共に、設備の拡張も進みました。

また1938年には、当社の源流の一つである児島窯業株式会社(後の川崎炉材～JFE炉材)が創業され、ろう石質耐火れんがの製造を開始。品川白煉瓦と共に国内産業の成長を支えていきました。

戦時中は軍需省の管理工場となり、戦局の進展と共に原料の確保が困難になっていく中でも、陸海軍の軍需工場向けおよび各製鉄会社向けに耐火れんがの製造を行いました。

そして、1945年(昭和20年)の終戦を転機とし、品川白煉瓦は平和産業として成長していくという展

望を掲げ、一時的に停滞した国内産業の中で復興に向けた道を模索していきます。

その一方で、戦後の1945年12月に労働組合法が制定されたことを受け、品川白煉瓦でも湯本工場と岡山工場で労働組合が結成され、新たな労使関係を構築する動きが活発化しました。

岡山工場では、賃金引き上げ要求に端を発した労働争議が訴訟にまで発展したことから、別に岡山工場従業員組合が結成され、現在まで続く労働組合の母体となりました。他の工場でも次々と労働組合が結成されましたが、最終的には1964年(昭和39年)に品川白煉瓦労働組合へと集約されていきます。

また、戦後の混乱がまだ収まっていない1947年(昭和22年)には、昭和天皇が中国地方巡幸の際、当社岡山工場にも足を運ばれました。

終戦直後は生産量が低迷していた鉄鋼業界でしたが、1947年に政府が、基幹産業である石炭と鉄鋼

に資金と資源を集中投入するという傾斜生産方式を実施したことで、産業全体の劇的な復興が進み、ひいては長期にわたる高度成長期へとつながっていきます。

特に1960年(昭和35年)以降、重厚長大産業の旗頭であった製鉄業界では、大規模な製鉄所の新設や増設が相次ぎ、高炉の大型化が図られると共に、平炉から転炉への製鉄技術の進歩によって、粗鋼生産量は急速に増大。1960年に2,300万トンだった日本国内の年間粗鋼生産量は、1972年(昭和47年)に1億トンを超えるという驚異的な成長を果たしました。それに伴い、当社の耐火れんがの生産量と売上高も記録的な伸張を遂げていきます。

そうした急成長の中、1974年(昭和49年)には、耐火物メーカーで唯一、モールドパウダー(鑄造の過程で鑄型への溶鋼の焼き付きを防ぐための潤滑剤)の本格生産を開始するなど、最先端技術の研究開発にも積極的に取り組みました。

その後も当社は、築炉をはじめとする伝統に培われた高度な技術と経験を活かして、各種施工機械や耐火物周辺設備の設計・製作など、高温域での操業を支える総合的なエンジニアリングサービスを強



当社創業者 西村勝三

化。耐火物を中心とするトータルソリューション企業へと成長していきます。

そして、1975年(昭和50年)に当社は創業100周年を迎え、その歴史をまとめた品川白煉瓦『創業百年史』を発刊。1998年(平成10年)には『川崎炉材六十年史』が発刊されました。

100周年から現在までの50年の間に、日本の経済には急激な変化が訪れ、産業界の行く手には様々な困難が立ちはだかりました。鉄鋼業界においては、技術の進歩が図られていく一方、不況の影響は避けようがなく、業界再編が急速に進みます。その中で私たち自身も、経営統合という環境の変化を経験することになります。

創業150周年を迎えた今、私たちはこれまで紡いできたDNAを継承し、次の50年、100年に向けた新たな一歩を踏み出しました。

本誌では、特に100周年以降の50年間にスポットを当て、現代につながる当社の歴史を俯瞰していきます。



昭和天皇(写真右)、岡山工場を行幸(1947年12月10日) 写真左は工場内を案内する青木均一社長(当時)

国内の耐火物・粗鋼生産量推移グラフ

